近江の古瓦 III 湖東北半部

湖東地方のうち、愛知川以北の地、現在の行政区画では、彦根市・犬上郡・愛知郡に属する地域を湖東北半部として、この地域出土の古瓦について述べることとします。

彦根市(旧犬上郡内)及び犬上郡の古瓦

現在の彦根市は旧犬上郡を中心として、坂田郡に属していた鳥居本地区や、愛知郡であった旧稲枝町を含んでいます。旧犬上郡内では、早くから竹ヶ鼻と高宮の2か所から出土した古瓦が知られており、正法寺でも古瓦が伝えられていました。また、犬上郡多賀町楢崎で最近古瓦が発見されました。このほか、この地域には彦根寺、敏満寺、勝楽寺、西明寺など著名な寺院がありますが、ここには古瓦の伝承は無いようです。

正法寺のものは拓本で見るだけで、出土地点や出土状況もわからず、寺院跡なのか窯跡なのかも判然としません。ただ、地名が正法寺であり、寺院とのつながりも考えられるので、詳細を今後の研究に待ちたいと思います。

多賀町楢崎のものは、最近現地からの報告によって、県教育委員会が調査した結果、恐らく窯跡であろうとの推論が出されました。

高宮のものは、早くから瓦の出土は知られていましたが、その遺構についてはほとんどわからず、出土瓦に関する知識も写真や拓本によるもので、実物は田中礎氏旧蔵の軒平瓦1個がわかっていただけで、他は所在不明の状態でした。しかも、この田中氏のものは、大津市から浅井町と、所有者と共に動いていて地元を離れていたため、具体的な調査はほとんど行なわれていませんでした。ところが、昨年この地出土の古瓦が多数報告され、その資料も豊富となりました。しかし残念なことに、遺構についてはなお不明です。

竹ヶ鼻の古瓦出土地は、平安時代初期に建立されたという恒河寺の跡に比定されたこともあるものですが、遺構の調査は行なわれておらず、平安時代初期創建の寺院とするには古瓦の示す年代が一致しないようですから、彦根市史で述べているように、竹ヶ鼻廃寺と呼ぶ方が妥当でしょう。

これらの古瓦の示す時代を考えてみますと、竹ヶ鼻出土のもののうちに白鳳時代のものがあるようです。同地の古瓦のうち、単子葉8弁で周縁に同心円をめぐらした軒丸瓦は白鳳時代のものとしてよいでしょう。これに対応する軒平瓦があれば、恐らく重孤文であったでしょうが、現在までのところ発見されてい

小八木出土　舌出し鬼面文瓦製品

1979. 11. 30

財団法人　滋賀県文化財保護協会

ないようです。同地ではこのほかに、複弁８葉のものや、単弁16葉で中房が大きく13個の蓮子をもつ形式の軒丸瓦がありますが、これらはすべて奈良時代のもので、これに対応する軒平瓦は、２種類の均整唐草文の軒平瓦と見るべきでしょう。

高宮出土の古瓦は、前述のように最近その資料が増えましたが、種類のうえでは以前知られていたものばかりです。軒丸瓦は複弁８葉のもののほかに単弁16葉のものがあるようですが、後者は現在実物が見あたりません。軒平瓦は上下に珠文と鋸歯文をもった偏行唐草文のもので、恐らく前述の複弁８葉のものと対になるのでしょう。

楢崎出土の瓦は複弁８葉ですが、周縁が珠文や鋸歯文でなく、近江の単子葉系に多い円圏を持つものです。この種の軒丸瓦は現在までのところ湖東では発見されておらず、これが瓦窯出土のものとして、どこの瓦を焼いたのかは今後の調査課題と言えましょう。なお、正法寺のものは拓本が１枚あるだけで詳細はわかりませんが、単弁系のもののようです。

旧稲枝町の古瓦

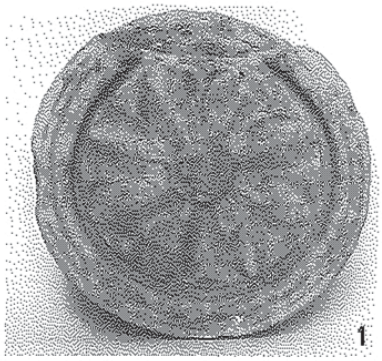
現在は彦根市に属していますが、旧愛知郡稲枝町の古瓦は学界に紹介されたのも早く、注目すべきものです。ここには、上岡部・下岡部と普光寺に古瓦の出土地があります。普光寺は以前は神崎郡に属していましたが、明治31年愛知郡に編入された所です。

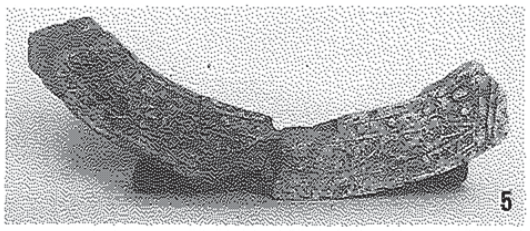
正法寺出土古瓦拓本(早崎信一氏拓)

上岡部の古瓦出土地は屋中寺跡の名で呼ばれていますが、これはこの地の小字名によるものです。荒神山麓にあり、この地の総社的な稲村神社に近く、このあたりの中心的な地域としてふさわしい場所と言えます。ここからあまり離れていない下岡部にも古瓦の出土地がありますが、出土の古瓦も両地共通するものがあり、二つの寺院跡なのか、一つの寺院跡とその付属施設なのか、その関係の詳細はわかりません。普光寺の寺院跡は前述のように以前は神崎郡に属した地で、ここには塔心礎も残っていますが、屋中寺跡などとともにすべて発掘調査が行なわれておりませんので、出土古瓦からその寺容を推測するだけです。

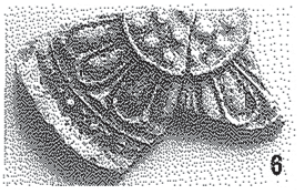
先ず岡部の古瓦について見ますと、単子葉８弁のものに２種類あり、中房が大きく、蓮子が１＋５＋９（中央に１個あり、それをとりまいて５個、さらにその外側に９個あるもの）で、周縁に鋸歯文を施したものと、中房が小さく、蓮子も１＋５？と少ないものです。このほか拓本で見られるものに、無子葉の単弁８葉で、蓮子が１＋４、周縁に櫛歯状に線文を施したものがあります。複弁系のものも数種類あり、すべて８葉です。中房が大きく蓮子も（１＋５＋9？)と多く外縁に鋸歯文が施されたものや、蓮子の数が１＋７と少なく外縁に櫛歯状の線文のあるもの、蓮子が１＋５＋９で外縁に鋸歯文と櫛歯状文を二重に施されたものなどが見られます。軒平瓦は発見された種類が少なく、重孤文のものと、奈良時代と思われる均整唐草文、それにかなり時代が新しくなると思われる波状の線を画いた極めて簡単な文様のものなどです。

普光寺の出土古瓦にも、単弁系のものと複弁系のものがあります。単弁系のものは無子葉の８弁で、蓮子が１＋４＋８のものです。複弁系のものの中には、法隆寺に見られる、

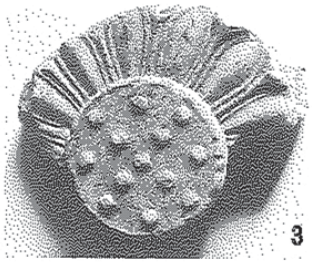


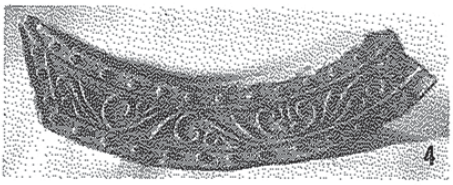


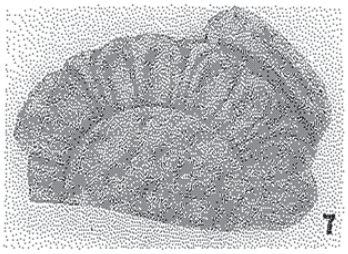
5・6 高宮出土



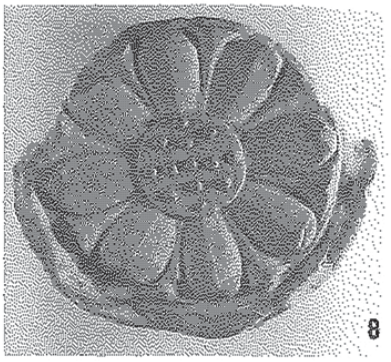
1～4 竹ヶ鼻出土

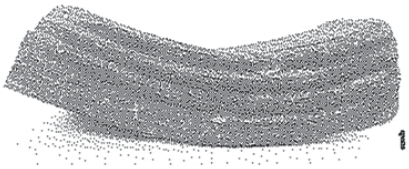




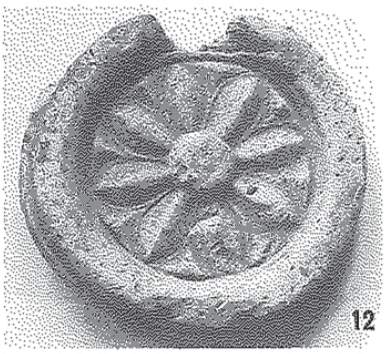


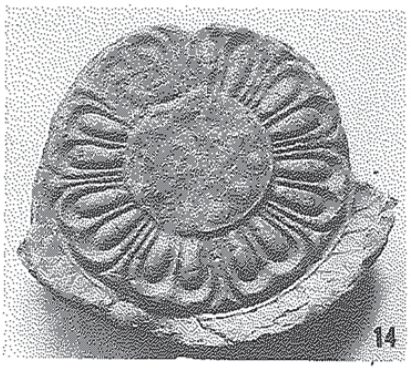
7 楢崎出土

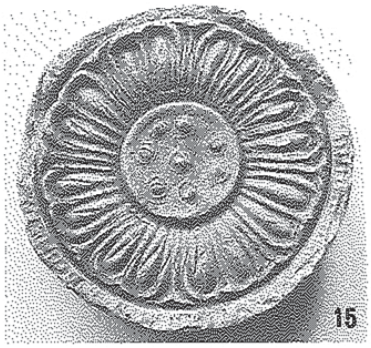


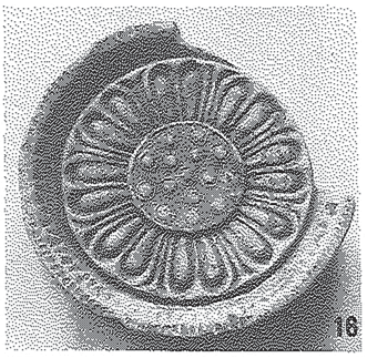


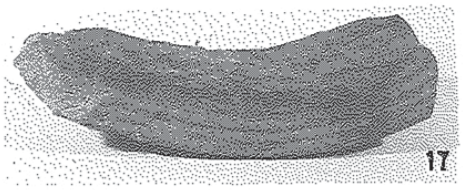
8～11 普光寺出土



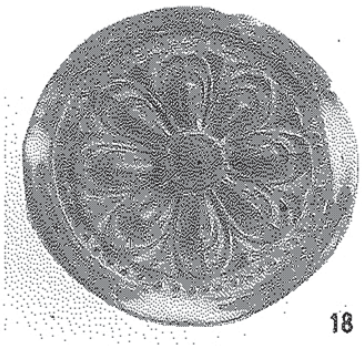


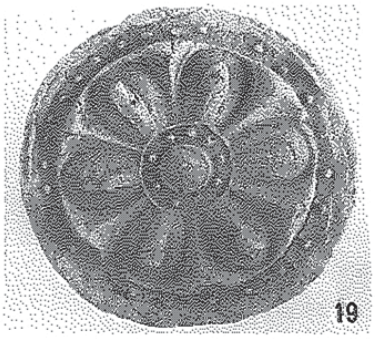


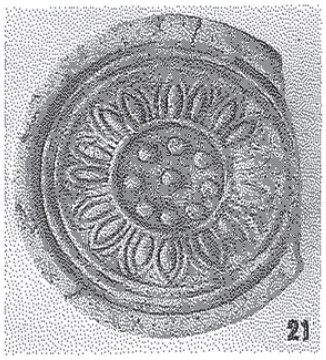


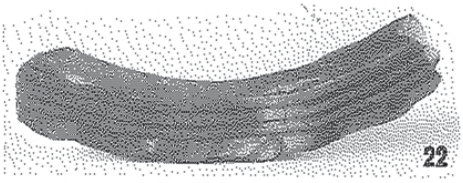


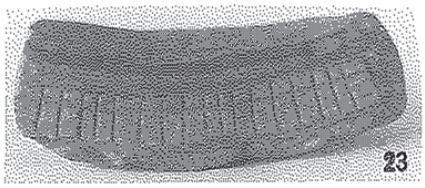
12～17 岡部出土



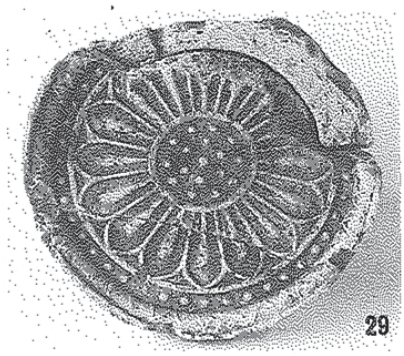


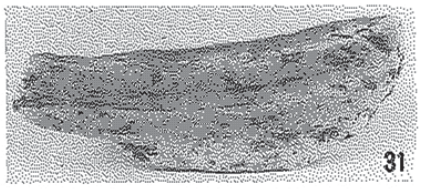


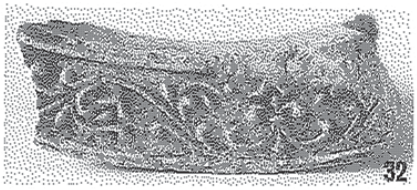




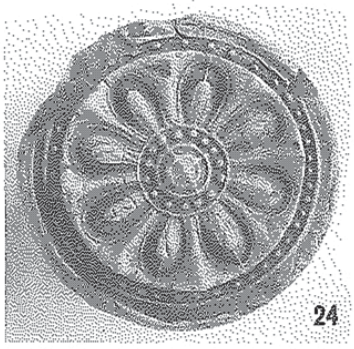
18～23 蚊野出土

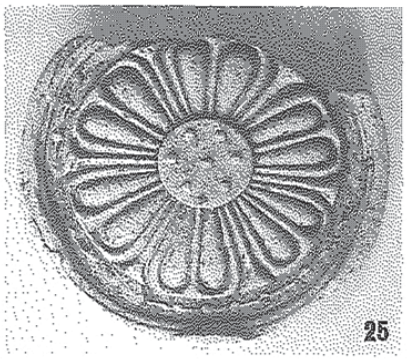


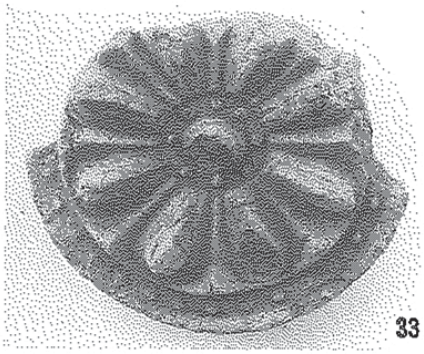


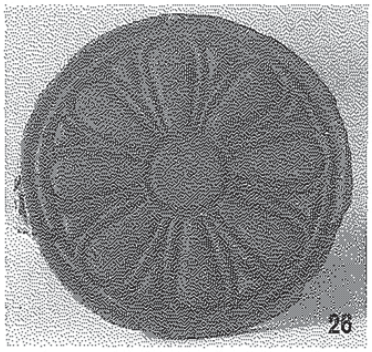


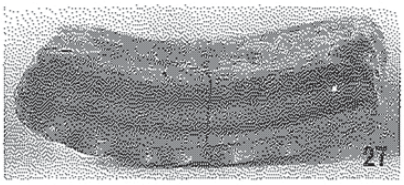
29～32 畑田出土

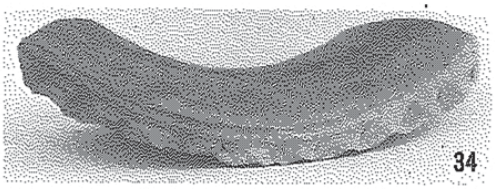






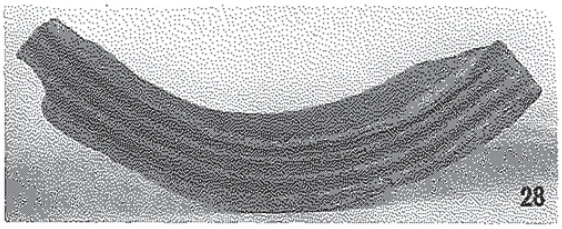






33・34 小八木出土

24～28 野々目出土



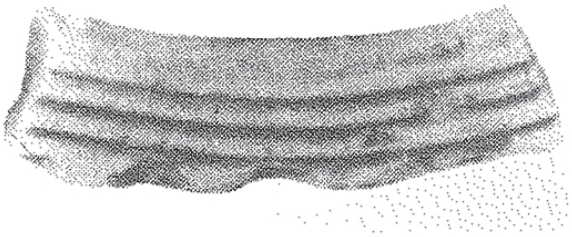
二つの子葉を入れる弁が完全に二分されていない形式のものがあり、これは県下では近江国衙域内で１片見られるだけです。他は通常の複弁系のもので、周縁は鋸歯文だけですが、これには８葉のものと６葉のものがあります。軒平瓦には重孤文が知られています。

愛知郡の古瓦

現在彦根市に合併されている旧稲枝町を除きますと、愛知郡の古瓦出土地は国道８号線より東側の秦荘町を中心にその周辺にかたまっています。秦荘町の目加田・蚊野・野々目・香之庄、湖東町の小八木、愛知川町の畑田等です。このうち、秦荘町香之庄と湖東町小八木は一つの寺院であったのかもしれません。このほか、湖東町横溝、愛東町園にも古瓦の出土が伝えられていますが、『愛知郡志』では、この二か所を共に瓦窯跡と見ているようです。なお、湖東三山のうち百済寺は推古朝創建の古伝があり、『愛知郡志』によると、古瓦が出土しているようですが、軒先に文様のある瓦は出土していません。同じく湖東三山の一つである金剛輪寺には古瓦の出土は伝えられておりません。秦荘町を中心とした諸遺跡は数年来の調査で夥しい古瓦の資料を出しました。これらは現在整理調査中ですから、このシリーズでは主な出土古瓦の写真に依ってその一端を示すこととし、遺跡の性格や古瓦の詳細は、その調査報告を待ちたいと思います。これらの古瓦のうち、軒丸瓦では文様面のほりが非常に深い単弁系の瓦が特に注意されるものでしょう。これは中房が小さく、中房の周囲に珠文があり、周縁にも珠文がめぐっています。弁は８葉のものと６葉のものがあります。軒平瓦では、重孤文で下端が波状におさえられているものが中心になっているようです。このほかにいろいろな種類のものが出土していますが、これらの一々については前にも述べたように説明を省きたいと思います。このほか、蚊野で鴟尾（しび）の破片が発見されていることは特に注目すべきことでしょう。

目加田では最近調査が始められました。『愛知郡志』所載のこの地出土瓦の写真の中には、米原町不動谷瓦窯出土品と同類と思われる軒平瓦の破片があります。ところが、今回の調査で重孤文に斜十字の線刻をした軒平瓦の破片が発見されました。これまで写真で示されたのとは少し異なるようですが、今後の調査でもっと資料が増加すれば、これらのこともより明らかになることが期待されます。さきに横溝や園の古瓦出土地は瓦窯跡ではないかという推論が『愛知郡志』に述べられていることを指摘しましたが、これ以外にも、これらの諸遺跡出土の瓦を焼いた窯について調査が進められており、常安寺や他の山麓地帯で新しく窯跡が発見されています。まだ正式の調査は行なわれていませんが、これらの窯の実態が明らかになり、瓦を焼いた窯のあることがわかると、当地の瓦を使った遺跡と、その瓦を焼いた遺跡をつなぐ総合的な研究が進められることとなり、その成果が期待されます。そのような中で、目加田の瓦と米原町不動谷瓦窯の結びつきがわかると、この不動谷の瓦が近江町高溝にもあるようですから、より広い範囲で瓦を通して往古の姿を垣間（かいま）見（み）ることができるのではないでしょうか。なお、この地の中心的な軒丸瓦の中房とそれをとりまく珠文の文様は、湖北の高月町や湖東南部の日野川流域にも見られ、それらとの関連も将来の研究課題と言えましょう。

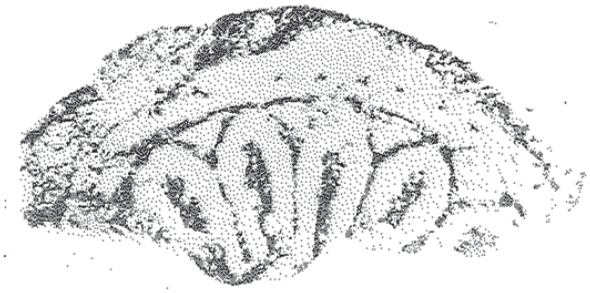
次に、湖東町小八木で、他に類を見ない瓦製品が出土しているので、これについて一言しておきましょう。長方形で下端の欠失した厚い板状のものですが、文様は鬼面で、しか



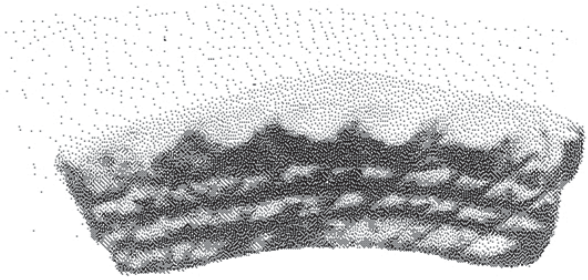
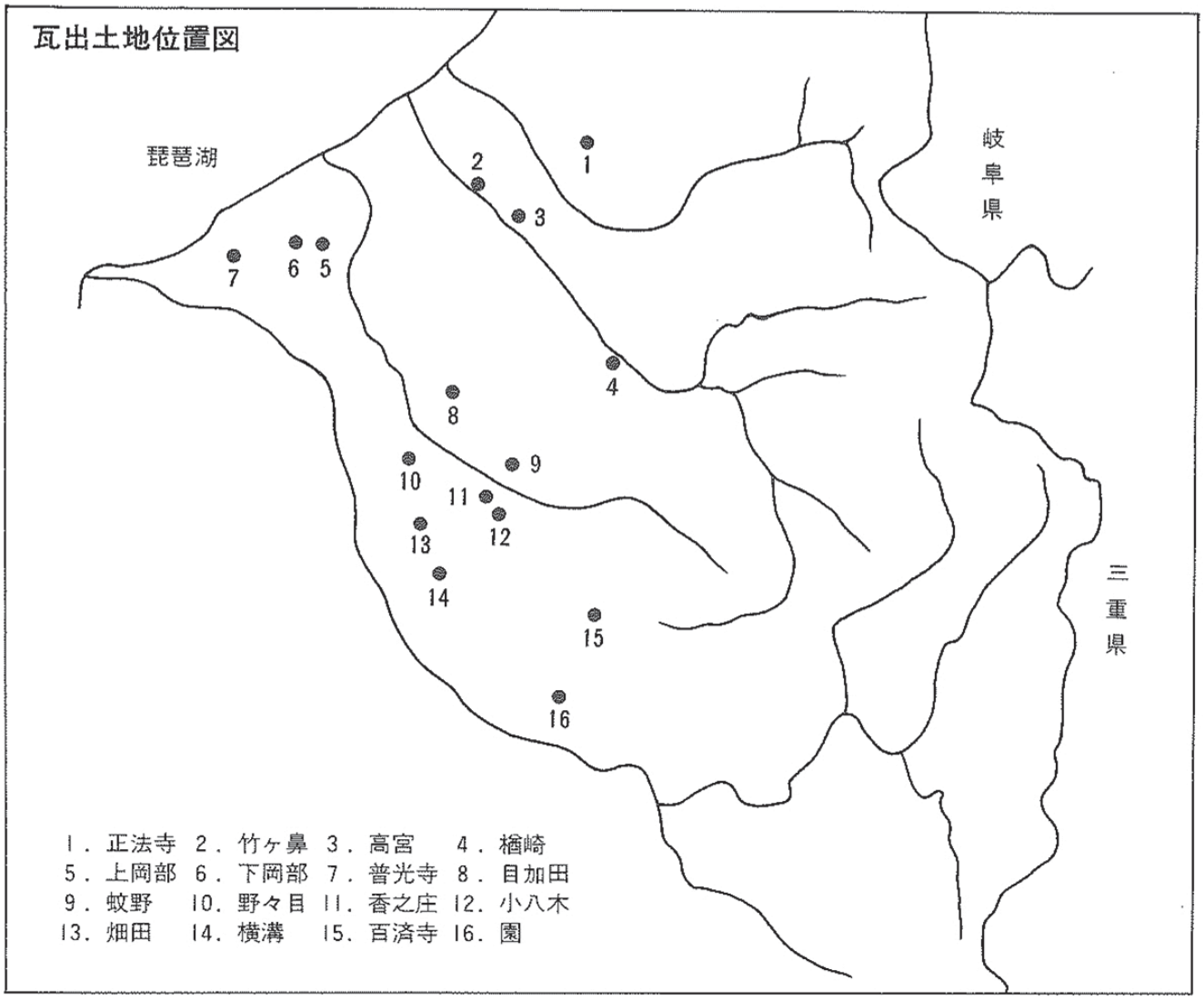
香之庄出土古瓦（愛知郡志所載）

もこれが大きな舌を出しているものです。最初は特殊な鬼瓦かとも思われましたが、鬼瓦としてはこれを棟の端に固定するための設備がなく、又、下端が欠失しているので明言は出来ませんが、鬼瓦にある下端の半円形のくり込みは無かったのではないかと思われます。もしこれが屋根の上にあったとすれば、鬼瓦以外には考えられませんが、前述のような疑問点もあり、あるいは塼仏（せんぶつ）に見られるように、壁面等にはめこまれたものかもしれません。そうすると邪鬼の一種とも考えられますが、いずれにしても類例が無いため、将来の研究に待たねばならないでしょう。

（西田　弘氏提供）



横溝出土古瓦（愛知郡志所載）
畑田遺跡で同種の古瓦が出土している



目加田出土古瓦（愛知郡志所載）
米原町不動谷瓦窯跡で同類の古瓦が出土している